
とわのこぬこ

uyr yama

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とわのこぬこ

【Nコード】

N0029Y

【作者名】

u y r y a m a

【あらすじ】

ぬこは今日も、にゃーにゃー、にゃーにゃー。海鳴の街の空は青く。海も、青い。世界は広く、暖かく。やさしいご主人と、その妹たち。そんな優しい環境で、ぬこは前世のしがらみに気付かない。だって、ぬこはぬこだもんね？

ぬこてんせー（前書き）

地の文は、基本的に童話の絵本的語り口調（女神さまバージョン）です。

ぬこてんせー

身体中が痛い。

呼吸をするのも辛いほど。

いいや、それこそ、生きる事が辛くなるくらいに、身体が痛い。

痛みのせいなのか？

視界がぼやけて何も見えない。

耳鳴りが酷く、聞こえてくる音はザーザーといった異音だけ。

だから周りがどうなっているのかもワカラナイ。

ああ、死ぬのだな……

あともうちよつとだったのにな……

苦節20ウン年。年齢〓彼女イナイ歴から何とか脱し、ようやく、ようやく童貞を卒業できそうだったのに……っ！

クソっ、クソっ、クソっ！！

腹立たしさと無念さで、気が狂ってしまいそうだ。
だけでも、まあ、仕方ないか……

傷だらけで血塗れな青年は、そこで生きるのを諦めた。

彼は諦めが速いのだ。

泣いてすぎる恋人と、青年に突き飛ばされて呆然としている少女と、その少女の母親が申し訳無さそうに、ありがとう、ありがとう、と何度も頭を下げていた。

でも、耳鳴りが酷い青年の耳には届かない。

「クソ、マジで痛えよ……」

吐き捨てられた悪態は、恋人の嘆きの慟哭のせいで誰の耳にも届かない。

それでも、今わの際の奇跡なのか、青年の視界がクリアに広がった。耳鳴りがサァーっとひいて、全ての声が聞こえる様になった。

青い、青い、どこまでも青い空だ。

ざわめきと、嘆きの慟哭が、それら全てを台無しにしてたけど。

視線を巡らせる。

涙と鼻水まみれの恋人と、真っ青にしているトラックの運転手。

そして、黒い子猫。

「生まれ変わるなら、ぬこがいい」

「バカっ！ なに……なに言ってるのよおっ！！ って、ぬこって言い方止めなさいってあれだけ言ったでしょ！？ オタク臭いのは止めるってアレだけ……」

泣きながらそう言う恋人に、青年は最期の力で笑ってみせた。

「お、まえの、そういうトコが、大嫌いなんだ。だから、もう、別れようぜ。そして、さっさと、俺のことな……か、わす……ちま、え……」

死に際に格好つけるのは、漢のロマン。
満足だ。これ以上ないくらいに満足だ。

童貞捨てられてたら、言う事なかったんだけどな。

そこで、青年の命の鼓動が止まった。

「ばかぁーっ!!」

だから恋人の嘆きの絶叫は、青年の耳には届かなかった。

次に気がついたとき、やっぱり目は見えなかった。
それでも本能なのかな？

暖かい何かにすりよって、必死にかぶりついた。
周りにも、自分と同じ何かが一杯いる。

なー なー みいー みいー

ああ、この声は、ぬこ だ！

いや、もしかして、自分もぬこなのではなかるうか？

そういや、死ぬ直前に思ったなー。

生まれ変わるなら、ぬこがいいって。

そう考えながら、ぬこは兄弟だか姉妹に負けないよう、必死にお母さんネコのおっぱいをちゅーちゅーする。

人間じゃなくなったのはシヨックだけでも、これからのぬこ生、必死に生きる為にはおっぱいが必要なのだ！

元青年……現ぬこはやっぱ諦めが速かった。
人間としてのプライドをあっさり捨てて、ぬこになったのだから。

ぬこは今日からぬこになる。

ネコではなくて、ぬこ。

彼女が言ってたではないか。

ネコをぬこ呼ぶのはヤメロって。

オタクみたいだからヤメロって。

だったらぬこはぬこになろうと思う。

世の紳士たちの為にも、ネコではなくぬこに。

そうすれば、もう、オタクだとバカにされないのだから……

ぬこが自分をぬこだと言っても、しよせんはネコなんだと分かっている。
いない。

そんなぬこは、お腹いっぱいオツパイを吸って、ふぁ〜と大きく欠伸をしたあと、兄弟姉妹に囲まれながら、暖かい眠りにつくのだ。

さあ、アナタの望みはかないました。

どうか、今度は幸せに……

にー

ぬこは目の前の光景に、目をキラキラさせた。

ぬことして産まれ落ちて以来、初めて目にした人の文明。

小高い丘の上から見たその光景は、前世の人間だった頃の郷愁を、否が応にも思い越されるからです。

「みゃーう」「みー」「みゃう」「みゃん」「なーなー」

さあ、行くのだ！

っと、ぬこのきょうだい達はぬこを急かしました。

ぬこを置いて、いつのまにやら立派な大人の猫に成長したぬこのきょうだい。

でもぬこは、いつまで経ってもこぬこのまんま。

きょうだい達は、みんなみーんな立派な成猫になったのに。

そうして一匹、また一匹とママネコさんの下から巣立っていくきょうだいたち。

本当だったらぬこもきょうだいたちと一緒に巣立つはずだったのに、

ママネコも、きょうだいネコも、ちっちゃいぬこが心配で仕方ありません。

だからぬこはママネコとずっと一緒。

ぬこが産まれた春の季節から、とっても暑い夏に変わり、色鮮やかな秋に変わり、白い死神が吹き荒ぶ冬になり……

そうして再び春になったある日、ママネコの下から巣立ったきょうだい達が、ぬこにとっての優しい世界を見つけ出し、こうして此処へと連れて来たのです。

この世で最も猫にとって安全だろう、海鳴の町こそ、ぬこにとっての安息の地となると信じて。

ぬこは子供の両手に納まる程度の身体をピョンと跳ねさせ、きょうだいと、そして大好きなママネコの方をジッと見ます。

「にゃーう（ぬこ、アナタの巣立つ日が来ました）」

「なーう？（なに言ってるの？）」

……前世が人間だったせいでしょうか？

ぬこは猫語が分かりませんでした。

それでも雰囲気的に何を言ってるのか分かってるのでしょうか。

小さな小さな両のお目々に涙がいっぱい。

立派な成猫になったきょうだいたちに、ふわふわモコモコの頬で、すりすりと頬ずり。

最後にママネコの鼻先をペロリと舐め……坂を一気に駆け下ります。

精神が完全にこぬこになった、前世が人間で、今はこぬこのぬこ。きょうだいとママネコが心配そうに見守る中、コテンと足を引っ掛けて、

「みゃうっ！？」

毛玉のようにころころと、人間の町へと転がり落ちていきました。

「「「「「にゃーっ！」「「「「「

思わずぬこに駆け寄りそうになったきょうだいとママネコたち。

でも、

「みゃうみゃうみゃーっ！」

ぬこの結構余裕そうな鳴き声に、足を止め、後ろを振り向きます。

「「「「「にゃんにゃんにゃーん！」「「「「「

一斉に別れの一声を上げると、「みーうっ!」ぬこの鳴き声を背に猫の世界へと帰っていきました。

さようなら、ぬこ

猫たちの、別れの言葉……

猫の……野生の世界は厳しい。

もう、会う事はないだろう、きょうだいとママネ」。

ぬこは泣きながら転がり、そして……

ひゃっほー。人間ごはんがぬこを待ってるぜー!

あっさりと気分を変えました。

……ぬこは、諦めが速く、気分に入れ替えも速いのです。

そうして、ぬこになって初めてのアスファルトに、ぬこになって初めての海の香り。

ぬこになって初めての人間に、ぬこになって初めてのひとりぼっち

……

とわのこぬこの冒険が、こうして始まるのです。

なーう なーう にゃん にゃん にゃん みゃう！

ぬこの鳴き声が、海鳴りの町に響きます。

ぬこはそろそろ人間の食べ物に恋しいです。

ネズミやスズメがご馳走な生活もいい加減に疲れたし。

ああ、魅惑のジャンクフード……

待ってる！ コンビニ！

待ってる！ カップラーメン！！

ぬこは、自分がぬこだって、覚えてるんでしょうか？

ぬこが行っても、コンビニでカップラーメンは買えませんのにね。

みー

むかーしむかし、海鳴の町に一匹のこぬこがいました。

そのこぬこ、

リンカーコアを持っていたり、気を操って最強ぬこだったり、
はたまたジュエルシードの力でミュータント化したり、
いやいや、それどころか死にかけて使い魔化したり、

なーんで、いつさいない、普通だけでもちょっと変わったこぬこ。

ぬこは海鳴の町に入るなり誓います。

ぬこは、町に生きる立派な野良ぬこになる！

ママネコやきょうだいに負けない、立派な野良ぬこになるのだ！

ととととと……

立派な野良ぬこを目指すぬこが、海鳴の町を短い足で疾走します。

目指すはコンビニ。人間ごはん！

……そう、こんなちよつと変わったとわのこぬこのお話が、海鳴の町で始まります。

通りすがりの人々が、ほんわかした表情で見ている黒い毛玉。ちよこんとコンビニの前に座る様が、とっても愛らしい。

「みゃう……」

でも、悲しげに鳴いています。

ぬこの目の前の建物からは、とても好い匂いがしてくるからです。
お腹がきゅって鳴るのに、ぬこはその建物の中に入ることが出来ません。

カリカリ、カリカリ……

「にう、にう」

悲しげに泣きながら、入り口の扉に爪を立てぬこ。
おでん、にくまん、お弁当……
数々の魅惑の商品がそこにある。

でもぬこはぬこだ。

人ではないから入れない。

いいえ、入ることが出来たとしても、中の商品を買うことは出来ないのです。

それに、建物の中の人間が、煩わしげにぬこを睨みます。

ぬことして生を受け、初めて感じる人間の負の感情。

ビクンッ！ 背中と言わず、全身が総毛立つ。

ぬこは後ずさるようにして数歩後ろに下がると、次の瞬間にはピュ
ーっと一目散に逃げ出しました。

「みゅあ、みゃうみゃうみゃー（怖えー、人間怖えー）」

ぬこは忘れていたのです。
自分がただのぬこだって。
力もお金も何もない。ただのぬこだって。

ぬこは寂しげに周りを見ます。

視界は低く、地面に近い。

今までは森の中で、周囲には猫だけだったから気にしませんでした
が、やっぱり人とぬこは違いました。

ぬこであると決めてはいましたが、まだまだ心の奥底では人間だと思
っていたのです。

でも、ぬこは強い子です。

たとえ力がない　とわのこぬこ　でも、心の強さだけは誰にも負け
ない。

だから、「にゃん、にゃう（ま、いっか）」と、やっぱりあっさり
と気分を変えました。

果たして、コレは心の強さなのでしょうかね……？

それはともかく、ぬこはお尻ふりふり、しっぽフリフリしながら歩
き出します。

ぬこはお腹が空いてるのです。

小さい身体でも、いっぱい食べるぬこ。

死の冬を乗り越えただけあって、一日二日程度食事を抜いても死にはしませんが、このままでは力がなくなつて狩りが出来なくなつてしまうのです。

……今はもう、ぬこを守り、ぬこのためにご飯をとってくれるママネコはいません。

ぬこは全部自分の力でご飯をゲットしないといけないのです。

と、その時でした。

ぬこの身体が大きな影に覆われたのは！
マズイ！　ぬこは大慌てで逃げ出そうとします！

ぬこは食物連鎖的に結構下の方に陣取ってますから、自分よりも身体が大きい獣や、空を飛ぶ猛禽類とかカラスなんかには襲われたらひとたまりもありません。

だからダッシュしようと足に力を入れた瞬間、

「腹が空いているのか？」

久々に人間の言葉を聞きました。

ぬこは恐る恐る後ろを振り返ります。

ズボンは黒、服も黒、髪も黒ならば瞳の色も黒。

全身黒づくめの高校生位の少年が、むっとした顔でぬこを見下ろしています。

ぬこは猫の言葉は分からなかったけど、やっぱり人間の言葉は分かるんだなと思いながら、「なー」と一声鳴きました。

すると少年はコンビニの袋の中から缶詰を取り出し、パカッと開けて、ぬこの前に差し出します。

缶詰には、猫まつしぐら！ と書いてあるのがぬこには読めました。

「にゃう？（食べていいの？）」

ぬこは不思議そうに鳴きます。

「ああ、いいぞ」

「みゃう？（ほんと？）」

「ああ、ほんとのほんとだ」

「なーう、なーうっ！」

元人間としてのプライドがまったくないぬこは、喜んで缶詰に顔をつつこみ、がふがふ、がふがふ、と一心不乱に貪ります。

初めて食べる猫缶は、思っていたよりもずっと美味しく感じられました。

それがぬこだからなのか、元々美味しいものだったからなのかは、ぬこには分かりません。

「乳離れは済んでたか……ミルクと猫缶、どちらがイイのか迷ったが、よかった」

少年のむっとりとしたしかめっ面が、ふんわり柔らかく笑いました。

げふっ

ぬこは全部食べ終わると、小さくゲップします。

そうして前足で顔をごしごししたあと、少年に「みうつ!」元氣良くお礼しました。

そして気づくのです。

「にゃうん?」(どうしてぬこがお腹が空いてるのを知ってたの?)「

すると少年は言います。

「コンビニの前で鳴いてただろ?」

「なーう?(それだけで?)」

「ああ」

少年は言葉少なくそう言うと、ぬこが食べた猫缶をコンビニ袋に戻し、踵を返しました。

「じゃ、またな」

ぬこに背中を向け、手を小さくひらひらさせます。
それはさよならの挨拶。

でも、ぬこは……

ぬこは、この黒いのをこしゅじんに決めた。
無愛想でちょっと怖い目つきだけど、きっと優しい人だとぬこセンサーが告げるから。

もう立派な野良ぬこになるなんて誓い、すっかり忘れてます。
ぬこはぴよぴよこと、短い足で必死に少年の後を追いかける。
そんなぬこに困った少年は、ぬこを抱き上げ視線を合わせると、

「家は飲食店なんだ。だからお前は飼えん」

そうはつきりと告げるのです。

でも、ぬこはそのまま少年の身体によじ登り肩に到ると、しっかりとしがみつきました。

そうして少年の頬に何度も頬ずりして、

ごしゅじんに、ぬこをもふる権利をあげよう！
なんだったら、肉球ぷにる権利でもいいぞ！

少年は大きく、「はあ〜」と溜息を吐くと、疲れたように自宅へと向います。

「一応は母さんと父さんに聞いてみるが……」

ダメだといわれたら、その時は諦めるよ？

言外にそう言う少年に、ぬこは分かったと返事をします。

「それでも、もしも許可がでたら、その時は妹のなのはと仲良くしてくれ。俺たちは、あの子に何もしてやれなかったから……」

「にゃーうー！」

「俺は高町恭也、お前に名はあるのか？」

「にゃーうー！」

「そうか、ぬこか……変な名だな」

「なーうつ！」

……ぬこは気づいているのでしょうか？

少年と意志の疎通が出来てることに。

まあ、気づいても、気づかなくても、ぬこはぬこ、なんですけどね。

みー（後書き）

原作とらは3でも、恭也は道端で出会った猫に餌をあげるために、コンビニに行ったりしています。

ちなみにその猫、後に自分の子供を恭也に見せるエピソードがあったりなんかして、とってもホンワカです。

幕間 ひろいん？ の憂鬱

私立聖祥大学付属小学校は一年生の教室で、一人の金髪美少女が窓際の席に座ってます。

「はぁ……憂鬱ね……」

重い空気を肺から出し、言葉通りに憂鬱そう。
頼杖をつきながら、とても小学生とは思えない哀愁漂う瞳で、窓の外を見ていました。

「どうしたの、アリサちゃん」

つい先日、その金髪美少女、アリサ・バニングスの友達となった月村すずかが、心配そうに声をかけます。
アリサは憂鬱そうな表情を隠すことなく、将来は大和撫子な美人になるわね、この子……と思いながら、

「ちょっとね……」

そう言って、手をひらひらさせました。

「話せないことなの？」

「別に……ただ、ちょっと捜してるヤツが見つからないのよ」

それだけ言つと、重い息をハア〜と吐き出し、話はこれでお終いとばかりに再び外を見ます。

アリサには、前世の記憶がありました。

ちなみにアリサ・ローウェルな前世ではありません！

あんなトンデモ悲しい平行世界な前世ではないのです。

かなり、近いけど……

それはともかく、アリサは前世で一人の青年とお付き合いをしていました。

特に際立った才能がある男ではありません。

イケメンだった訳でもありません。

それでも、前世の彼女は彼のことがとても大好きでした。

IQ180オーバーの超絶美人にして、絶対無敵のお嬢様！

群がる男は彼女の背後関係と容姿にメロメロです。

でも、彼は違った。違ったのです！

どう違うかと聞かれれば困りますが、とにかく違いました。

そんな彼のこと、アリサは好きで好きでどうしようもありません。

だからアリサは、奥手でオタクな彼を押せ押せで口説き落とします。彼女はツンデレな強気っ子でしたが、流石に年齢が20オーバーなだけあって、こういう時は積極的でした。

押せ押せアリサに彼は目を白黒させてしばし呆然としたあと、ひやつぽー、これで年齢〓恋人イナイ歴から卒業だぜ！なんて言いました。

アリサは頬を引き攣らせましたが、まあ、これからの教育しだいよね？なんて思いながら、につこり笑います。

彼は何かと言うと、脱 童貞なんて叫ぶおバカさんではあったけど、言ってることと裏腹に、ガツガツ身体を求めようとはしません。

今迄彼女の周りに居た男たちとは矢張り違います。

ああ、やっぱりコイツにしてよかった。

アリサは幸せでした。あの日までは……

ある日、彼は子供を庇ってトラックに跳ねられ死んでしまうのです。

……アリサは泣きました。

いっぱいいっぱい泣きました。

泣いて、泣いて、泣いて……そうして彼の最期の言葉を思い出します。

お前の、そういうトコが大嫌いなんだ。だから、もう別れようぜ。そして、さっさと俺のことなんか忘れちまえ。

カッコつけ過ぎなのよ、バカっ！

私は絶対にアンタのことを忘れたりなんかしないからっ！

……でも、そうね。キチンと、アンタ以外の誰かと、幸せになつてみせるわ。

だから、だから今だけ……は、泣い、ても……いいよ、ね……

最後にもう一度だけワンワン大泣きしたあと、彼女は立ち直ります。だけど、世界は彼女にとって、とても厳しかったのです……資産家の親を持つ彼女は、ある日、親の商売関係のトラブルに巻き込まれ、誘拐されて、そのまま……

アリサは、首を絞められ意識が遠のく中、最期に思いました。

ああ、死ぬんだ、私……

こんなだったら、アイツにさっさと初めてをあげればよかったな。

なのに、私ったら……

……会いたい。

アイツに、会い、たい……

会って、今度こそアンタと……

しあわせになるんだ

次に気がついたとき、彼女は赤ん坊になっていました。
アリサは長い長い赤ん坊生活のなか、思ったのです。
これはきっと、神様がくれたチャンス。

もう一度、アイツと出会い、今度こそ幸せになるための……

それでも思わなければ、赤ちゃんなんてやってられなかった、なん

てことは秘密です。

「……サちゃん、アリサちゃん！」

「ふえっ!？」

物思いにふけてたアリサは、突然に身体をかくかく揺さぶられました。

アリサを揺さぶっていたのは、すずかと同時期に友達になった高町なのは。

ツインテールをぴよこぴよこさせる、笑顔が物凄く可愛い女の子です。

前世では友人がまるで居なかったアリサは、すずかと、なのはがとても大切です。

「ねえっ！ちゃんと聞いてっ！」

「なによ、もう……」

「あのねあのね、昨日うちにねっ、ちっちゃいこねこさんがきたのっ」

なのは手をばたばたさせて、その子猫がいかに可愛らしいか説明します。

すずかは猫派なので、なのはが仲間になったことが嬉しいみたい。

でも、アリサは犬派です。

猫も好きですが、どうも彼がぬこぬこ言ってたのを思い出して、ちよつとイラッとする。

なんせアノばか。可愛い恋人ほつといて、猫ばかり可愛がるヤツでしたから。

まあ、逆恨みってやつですね。

でも、それはなのはの家にきた子猫には関係のないこと。
アリサは首をぶんぶん振って気を取り直すと、

「んじゃさ、今日はなのはんちであそぼっか？」

今日は丁度良いことに、塾とお稽古事はありません。

すずかはあるみたいでしたが、夜からなので嬉しそうに頷きます。

そして、なのはも……

「うんっ！」

元気の好い返事です。

そして、再びどれだけ子猫が可愛らしいかを語り始めました。
楽しそうに聞くすずかと、ちよつと呆れ気味のアリサ。

そんなアリサは、なのはの話を聞いてるうちに、ふと思い出します。

生まれ変わるなら、ぬこがいい

あのバカの言葉です。

まさか、ね……

でも、もしそうだったら、どうしよ？

アリサとぬこの再会まで、あともう少し……

……でも、お互いに気づくんでしうか？

「でねでね、お名前は、ぬこちゃんって言うのっ！」

ぶーっ！ と思い切り吹き出したアリサは、わりと早くに気づくか
もしれせんね。

「あ、アリサちゃん!？」

「どうしたの？ 大丈夫？」

「あ、はは、は……だ、大丈夫よ、大丈夫。そんな訳ないんだから
っ」

「なにがなの？」

「なんでもないわよ!なんでもっ!」

主人公がただのぬこだって、みんなキチンと理解してるよな？

人間にメタモルフォーゼで、アリサとちゅっちゅっなんてないんだからなっ！

大体、ヒロ……って誰だよおまヒィきんぱつのあくあ wse drift
gyふじこ1p

この作品自体の年齢的な設定。（原作とは関係なしに、この設定）

ぬこ 1さい

ごしゅじん 高校2年生（とらは的な意味で一年留年）

月村 忍 高校2年生

高町美由希 中学3年生

高町なのは 小学1年生

その他は、なのはの年齢に合わせて考えろっ！

高町ぬこ はじまります

しろーが家業の喫茶店に、みゅーが学校に、ごしゅじんがなのはをバス停まで送り、そのまま学校へ、最後に桃子さんが家の戸締り。

人の気配が無くなった高町家で、ぬこの時間がのんびりとすぎいきます。

柔らかいふかふかの座布団の上にちょこんと座り、視線の先はテレビ。

ぴっぴっぴっぴーんっ！

お昼の時報が鳴りました。

テレビからタモさんが現れ、ぬこは懐かしそうに目を細めます。

でも、ぬこはぷにぷにの肉球で器用にリモコンのスイッチを押してテレビを消しました。

わくわくお昼ごはんの時間だからです！

「なーう！　なーうっ！！」

桃子さんがお出かけ前に用意しておいてくれた、お昼ごはんの有る場所へと駆け出すぬこ！！

焼いた鮭の切り身にちくわとお米のご飯。

夢にまでみた人間ごはん！

ぬこは「みゃーお！」と満足そう。

正直、ぬこはあまり期待していませんでした。

本来、塩分は猫によくないからです。

ですから鮭の切り身なんて出てくるワケがありません。だけでも、ぬこのごしゅじんである恭也は言いました。

「塩分は控えめで、出来るだけ俺たちと同じ物を食べさせてやって欲しい」

恭也の言葉に、桃子さんは嬉しく思いました。

だって、今までお願いなんてされたことなかったんだもの。

だから桃子さんははりきるのです！

猫に塩分は必要ありません。

内臓に負担をかけるので、与えない方がいいのです。ですが人間のごはんは塩分が大量に含まれています。

でも、桃子さんはやりました！

見かけぬこが喜び踊る人間、ごはんですが、中身はまるで違うのです！！

ぬこはそんな桃子さんの工夫と苦勞も知らず、久々に食べるちくわとお米にご満悦。

焼いた鮭の切り身も、骨と皮も残さず、

はぐはぐ、はぐはぐ……

あむあむ、あむあむ……

ぺろりとゼーんぶ食べました。

最後に猫ミルクをいっき飲みして、けぶつとげつぶ。

そうして、とことこ歩き出す。

まんまるまっくろなミニぼでーに、ちっちゃいぼんぼんみたいなしっぽと、短くぶつとい4本の足。

そしてなんでお腹の一部分だけが真っ白なぬこは、高町家で最も日当たりのいい場所、お庭へと続くベランダの板張りで、この家のぼすである桃子さんが敷いておいてくれたタオルの上に寝そべった。

そよそよと吹く風が、ぬこの柔らかい体毛をふわり撫でさする。

ぽかぽか陽気にその春の風はとても気持ちよく、うつら、うつらと

夢心地。とても、しあわせな気持ち。

昨夜ぬこは、ぬこになって以来、初めてと言ってもいいくらいにゆっくり眠れました。

まだ目もあまり見えず、耳も全然聞こえない頃ならともかく、それなりに世界が解り、はつきりとぬこだと自覚して以来、初めて……

昼、獣の鳴き声に恐怖し、夜、風に擦れる草の音でビクンと目を覚ます。

だって、ぬこは犬が怖かった。

だって、ぬこは狐が怖かった。

だって、ぬこはトンビが怖かった。

だって、ぬこはフクロウが怖かった。

だって、ぬこはカラスが怖かった。

だって、アライグマに襲われたときなんて、ぬこは死を覚悟したくらい怖かった。

だって、だって、だってだって……

でも、もう怖がる必要はなくなったのです。
安息の地を、手にする事が出来たから。

ママネコときょうだいが見た、ぬこにとっての安全な場所。
ぬこは確かにそこに辿り着いたのです。

さあ、ぬこ。アナタはこれからどうするの？

「みゃうっ」

そうだね、ぬこ。

ぬこは、そんなのーんも考えてないものね。

だって、ぬこはぬこだもん。

今も学校から駆け足で帰ってくる、ちびっこモンスターの脅威も知らず、ぬこはママネコと、きょうだいの夢を見る……

ぬこは、もう大丈夫だから安心して。

これから、ごしゅじんに寄生して生きる、立派な飼いぬこになるからさ……

むむっ!?

高町家のお庭に面する板張りで、ふわふわのタオルに包まって眠るぬこ。

ぐでーっとお腹を見せて眠るその姿は、とっても愛らしく。
なのはは手をにぎにぎしながら悶えます。

「はにゃ〜、ぬこちゃんかわいい〜」

いいえ、なのはだけじゃありません!

なのはの友達のアリサとすずかもメロメロです。
時折、ぴすぴす鼻を鳴らし、「みう……」なんて幸せそうなぬこを
見てると、こっ胸が熱くなってしまうのです!

これが、萌え……

アリサとすずかはそう眩きました。

「どんな夢見てるのかなあ」

「さあね。でもま、いい夢見てるんじゃない?」

ふわふわタオルに顔をこすり付け、寝言なの？ にゅあにゅあ小さく鳴いてるのを見たら、誰でもそう思っちゃう。

ねえ、ぬこ。

あなたはどんな夢を見ているの……？

それは白い死神の季節。

ぬこの全身が全部埋まってもまだ足りない程の雪。

その上をてとと走りながら、ぬこは冬の恐ろしさを心底味わっていた。

人として生きてた頃には、こんなに恐ろしいモノだとは思わなかった。

せいぜいが電車のダイヤが乱れたり、滑って転ばないように気をつけないかと思う程度で。

まず、餌がない。

むしろぬこが餌。

それはどんな季節でもそうだけど、特に冬は餌が少ないから、必要以上にぬこは狙われるのだ。

ほんとう、どれだけ狙われたことか。

ほんとう、どれだけ怖かったことか。

なんせぬこはちっちゃい。しかも真っ黒なぬこは、白い雪の上でよく目立つ。

だからぬこは、いつもてとと真白の雪に、ちっちゃい足跡をつけて走ってた。

食べられてたまるか！ 死んでたまるか！ と、必死になって走ってた。

それでも！

フクロウに狙われ、そのフクロウをママネコが逆に狩って。
キツネに狙われ、ママネコが戦って追いついて。

アライグマに食べられかけて、気づいたらママネコに傷口ペロペロ
されてた。

そうして寒い寒い一面の雪景色の中、死に掛けたぬこは、ママネコ
の暖かいふわふわもこもこのお腹のした。

「にゃー」

大丈夫？

「みゃん、みゃうつ」

だいじょぶじゃない……

前世が人だったせいか、ぬこはママネコの言葉が分からない。
でも、何となくは分かった。

きっと、ぬこを心配しているのだと、分かった。

「みゃ、みゃ……ん」

ごめんなさい。ぬこ、ちっちゃくてごめんなさい。

ぬこがいなかったら、ママネコはもつと楽に冬を越せたはず。
だって、フクロウを狩れるくらい強い猫なのだから。

「みゃう、みゃーお」

いいからお眠りなさい、私の可愛いぬこ。
いつかきつと、アナタは誰よりも強い猫になれる。
その日を夢見て、お眠りなさい……

「にゃ、にゃん」

暖かい……ふわふわもこもこ、あった、かい……

ぬこはママネコに守られるようにしながら、彼女の暖かい毛皮の下
でぬくぬく、ぬくぬく。
冬の凍りつくような風も、冷たすぎてむしろ痛い領域の雪も、ぜん
ぜん気にならない。

ああ、ずっとこうしていたかった……
ずっと、ずっと、ずーっと……

だって、ぬこはママネコが大好きだから。

でも、ぬこは決めていたのだ。

春になったら、遅い親離れをするのだと。

いつまでもママネコの傍に居る訳にはいかないのだ。

だって、ここは野生の世界。

ぬこと一緒にいれば、ママネコまで、

死んでしまうのだ……

でも、今だけは、ママネコの傍で甘えようとぬこは思っ

あつたか ほわほわ だいすき おかあ……さん

ママネコは、ぬこが何を考えているのか分かっていました。

だから自分の下から巣立っていった子供達に、ぬこにとって安全な場所を探すように命じたのです。

なんでそんなコトが出来たんだって？

あのね、ママネコは、この一帯を治めるヌシなんですよ？

だれよりも、だれよりも強い、灰色猫。それが彼女。

そんな私の子なのだから、アナタはきっと強くなる。
きっと、きーっと、強くなる……

でもぬこは、そんなママネコの期待もなんのその！
あったか　ぬくぬく　ぽややゝん　っと、ママネコの体温に幸せま
んきつ。

だって、ぬこはずっとただのぬこのまんまだもん。

なのはも、すずかも、もちろんアリサも、ぬこのあんまりにも幸せ
そうな寝顔に、うつとりほにゃー。
時間を忘れてただぬこの寝姿を見続けます。

と、その時でした。

「そうだった！」

なのはは何かに気づいたように叫びます。

なのはぬこが大好きです！
だからなのは、ぬこに自分の宝物をプレゼントすることにしたのです！

ツインツインな髪が歪なサイドテールになるのも気にせずに、なのは自分の髪をしばるリボンをほどきました。

「あつ、ダメ！　なのはちゃん！！」
「待ちなさい！　なのはっ！！」

アリサとすずかは、なのはが何をしようとしているのか分かりました。
だから声を荒げて止めようとします。

でも時既に遅し。

なのははリボンをぬこの首に巻いて、きゅっ「にゃゝっ」「ぬこの断末魔です……

子供の力。

でもぬこにとってはもの凄い力。
そんな力で絞められちゃったら、ぬこは夢から覚めず、そのまま新たな場所へと旅立つちゃいます。
ぴくぴく、ぴくぴく……止まらない痙攣。そして、パタッと動きが止まりました。

……さようなら、ぬこ。

また、会いましょう……

な

ぬこがお昼寝から目を覚ますと、そこは喧騒の真っ只中。

何だか首が痛いのと、少し苦しい気がするけど、正直それどころじゃない。

叩かれたのか、頭を痛そうにおさえてわんわん泣くのはと、眉を顰めて怒り顔のごしゅじん。

そんなごしゅじんに、見知らぬ少女が2人、平身低頭にぺこぺこ頭を下げていた。

「なーう」

ぬこが声をかけると、ごしゅじんはホッとした顔でぬこを両手で包み持ち上げた。

ごつごつ堅い手の平だけど、ぬこはごしゅじんの手が大好き。

ママネコには適わないけどな！

「大丈夫か？」

「みゃ？」

「なんでもないならいいんだ。……なのは!」

「あゝいっ」

泣きながら、それでもはつきり返事を返すのは。

……いったい何があった、ごしゅじん?

「悪いことしたら、どうするんだった?」

「ごめんなさいするの……ごめんね、ぬこちゃん……」

……何を謝ってるのかさっぱりです。

でも、ぬこは空気をキチンと読む好いぬこです。

「にゃー」

と一声優しくかけてあげるのだ。

この日、なのはは初めて怒られた。
もちろん、今までも小さい事で怒られたことは沢山ある。
それでも、こんな風に怒られたのは、本当に初めてで。
いつもいい子でいようとしていたなのはは、こうやって怒られるこ
とで、肩から余計な力が抜けた。

なのはは好い事したつもりなのに、結果的にぬこを殺しかけてしま
ったのがショックだったけど、それ以上に兄に怒られたコトの方が
ショックだった。

でも、すぐに頭を撫でられて、優しく諭してくれる兄にとっても嬉
しく思うのだ。

だって、好い子でも悪い子でも、なのははなのはとして、きちんと
見ていてくれる証拠だったから。

そんな当たり前のコトに、なのはは今まで気づけなかった。
でも、もう気づいた。

私は、このままでいいんだ、って。

なのははこの日から、べたべたに兄に甘えるようになる。
ぶらこんなのちゃんの誕生である。

「なあ、ぬこ」

「みゃう？」

「お前に頼んだこと、覚えてるか？」

「にゃー」

それは、なのはと仲良くしてという、とても他愛のないこと。
当然、ぬこは覚えています。

「俺は、あの子に何もしてやってなかった。だからお前に頼もうとしたんだ。でも、それは逃げだ」

「みゃう?」

「俺が、俺たちが自分から動かないとダメだったんだな……」

ごしゅじんの膝の上には、安らかに眠るなのがいる。
こんなの今までなかったことだ。
なののは、誰にも甘えない子だったから。

でも、それは終わりを告げた。

「お前のおかげだな。ありがとう、ぬこ」

「にゃー?」

ぬこは、ごしゅじんが何を言ってるのか、さっぱりわからん。

でもま、いつか。

だって、ごしゅじんも、桃子さんも、みゅーも、ついでにしるーも、みんな笑顔だし。

そして、なののはも……

「おにいちゃん……ぬこちゃ、ん……だい、す、き……」

とっても幸せそうな寝顔だからな！

この世界を流れる大きな川。
その流れが、この日変わった。

変えた切欠となったのはぬこだったけど、それは本当にちっちなモノ。

本当に本当に、ちっちな、きっかけ。

「おやすみ、ぬこ」

「にゃ、にゃん」おやすみ ごしゅじん

優しい月の光が、ぬことごしゅじんを照らしていた。

……って、今気づきましたけど、ぬこ？ あなた、死んでなかったんですね？

オリキャラ設定

ママネコ

海鳴や国守台からちよつと離れた場所にある山の奥深く。

そんな山深い森のヌシである、通常の猫よりもふたまわりほど大きい灰色の猫。

ぬこを産む前は、天猫抜爪牙（笑）でツキノワグマと戦い勝利した。

後10年ほど生き延びることができたら、猫又どころかもののけ姫的なヌシになるかもしれない。

深く考えてはイケマセン！

きょうだい

ママネコの下から巢立ったのち、各々住む森や山でボス猫となる。
色は白だったり虎縞だったり。

現在嫁さん候補がいたり、旦那さん候補がいたり。

基本、普通のボス猫。猫を逸脱した存在ではない。

海鳴や国守台付近に生息はしていないが、その地の猫に相談し、この地の【猫】のヌシである陣内美緒を紹介してもらって、ぬこの今後をお願いした。

高町ぬこ

前世が人間だったため猫の言葉がわからず、人間の言葉しか理解できない。

ぬこの言葉自体は猫語wなんで、ぬこの言葉は猫たちに通じてます。
ちなみにぬこの意思を感じ取れるのが恭也。

KYOUYAではないはずだけど、ぬこの意志を感じ取れる時点で
kYOUYAかもしれない。

ちなみに小太刀でバリアジアケットを斬り裂いたりとかはない。

もちろん、恭也がリンカーコアを持っていたりとかもない。

あれ？ いつの間にやら恭也設定に……

ところで、こいつら本当に猫か？ と思うかもしれないが、とらはの猫はこんなもんだw

にゃにゃっ！

ぬこが高町家に嫁（？）に来てから、もう随分の時が流れました。

具体的に言えば、一ヶ月ぐらい？

ひとつきで随分？とかくだらないツッコミは受け付けません！

それは横に置いて、相変わらず成長しない子猫のままのぬこを、どこか訝しげに思う高町家……かと思いきや、そんなの全然関係ね！。

むしろ、

「可愛いからいいんじゃない？」

とはこの家のボス、桃子さんの言である。

「かーさん！？もしかしたら病気かもしんないんだよ！」

みゅーが少し困った口調でそう言うけれど、

「大丈夫だと思うわよ？　だって、ぬこちゃんだし」

なんの説得力もない言葉。

でも、一番ぬこと仲良しさんなごしゅじんが、コクンと頷いたりしたもんだから、結局はそのまんまになりそうな空気。

だけど、ぬこは思っています。

「みやあみやあ、みやー」

ぬこがちつつちゃいのは病気じゃないとは思っています。

それでも病院行って検査するのはいいと思うぞ？

「だ、そつだ。高町母よ」

「あのね、恭也。ぬこちゃんが何言っているのか分かるの、アンタだけなのよ？」

「そつだよ恭ちゃん！　はたから見たら変な人なんだよ！」

「む……母さんとはかく美由希。今日の鍛錬、覚悟しておくがいい」

「横暴だよ恭ちゃん！」

「なー！」

ごしゅじん、みゅーはぬことごしゅじんを心配してくれてるんだぞ！

ぬこはわたた抗議の声をあげるみゅーの身体をよじ登り、柔らかおっぱおにしがみつながら、優しく肉球ぶにぶにの手でアゴにぱんち。

目下の者に優しくするのは、目上の者として当然なのです。

「……仕方ない。美由希、ぬこに感謝しとけ」

「だからぬこちゃんは何言ってるのなんて分かんないってばー！」

ぬこのぬこばんちを顔に受けて恍惚としながらの抗議は、誰の心に響くことなく、むなしく高町家の朝の空気の中に消えていきました。ついでに元が人間だから何でしょうね？　ぬこもおっぱおぱふぱふ気持ちーです。

……あんま調子にのつてると、刺しますよ、ぬこ？

まあ、こんな感じで一ヶ月。

ぬこもすっかり高町家の一員です。

そんなぬこが、この一ヶ月で変わったことと言えば……

黒いまんまるぼでーに映える、まっかなリボンがついた首輪でおしやれさんになったことと、大切なお友達が沢山できたこと。

ちよつと懐かしい匂いのするツンデレ美少女アリサちゃん。

紫色の髪ってなんだよ！？ な、すずかちゃん。

そして一番たいせつなお友達は……

「ねえおにーちゃん。ぬこちゃん、今日も神社に行くんでしょうか？」

なのはが目をキラキラさせてます。

ぬこと一緒に行けば、つぶらな瞳のあの子と仲良くなれるかもしれません。

なんせ、ぬこナシで行っても逃げられてしまう。

なのはだけじゃなく、アリサも、すずかも、みゆーも、ごしゅじんまでも！

「みゃん」

「行かないそうだぞ。今日は病院に行つて検査してもらつて言うてる」

「そつかー、ざんねん」

「また今度一緒に行けばいいだろう。ただ、その時はキチンと誰か

……そうだな、俺が美由希か、アリサちゃんのトコの鮫島さん。この内の誰かと一緒じゃなきゃダメだ」

「はい」

手を上げて元気よく返事をするのはは、いつしよに行くのなら、おにーちゃんがいいです！とばかりに、ポフッと彼の胸に飛び込みました。

ぬことみゅー。ごしゅじんとなのは。みんなとっても仲良し。

……本当に、とても暖かな家族の風景。

桃子さんは思っています。

これも、みんなぬこちゃんのおかげよね。

もともと仲はよかったけれど、ここまで仲良しさんじゃなかったものの。

「ありがとう、ぬこちゃん」

「なう？」

ぬこにそんなこと言っても仕方ありませんよ？

だって、ぬこが特別何かをした訳ではないのです。

だからぬこには分かりません。

むしろ、ぬこの方が、かんしゃ、かんしゃなのですよ？

ただ……

「愛する妻と子供たちが最近冷たい……」

はぶられたせいか、部屋のすみっこでイジイジしてるしろーがキモイ。

「もう、士郎さんったらバカなんだから」

つついっとそんなしろーに身体をよせる桃子さん。
そうしてイチヤイチヤ、イチヤイチヤ……

「愛してるよ、桃子」

「私もよ、あなた」

2人を包むラブバリア。
ごしゅじん、みゅー、なのは、そしてぬこは、とても慣れた様子でスルーしつつ、

「さて、そろそろ学校に行くとするか」

「そうだね」

「おにーちゃん。なのははバス停まで送って行って欲しいです！」

「ん。ぬこ、帰ったら病院に行くからいい子にしてるんだぞ」

「なーう」

ゆつたりと家を出るごしゅじん一行と、それからしばらくして慌ただしく出ていく桃子さんとしろー。

そしてぬこもお散歩に出かけます。

この海鳴の町は、とても猫に住み心地のいい街。

海があり、山があり、そして野良猫を診てくれる獣医さんいて、そんな獣医さんの良人は、力ない野良猫たちに餌をくれます。

そんなこの町の猫達の王さま陣内美緒さん。

彼女に今日の病院代をまけて貰えるようにお願いしに行くか！

ぬこは足取り軽く、てとてと海鳴の街を闊歩するのですた。

フーッ!!

ペットショップの前に、スクーターに跨ってる美少女発見！
ぬこはその美少女に向かってダッシュです！

「なあ！」

「おつ、高町さんこのぬこじゃん。お散歩中かい？」

「にゃー」

陣内美緒さん。

ぬこは前世も含め、初めてみました。

リアル猫耳少女！

もしもぬこが人間だったら、間違いなく口説いてます。

だって、猫耳だよ、猫耳！

「ふっふーん。ダメだぞぬこ！わたしの好みは、こうでっかくて、
優しくて、料理が上手な人だかね！」

「にゃう……」

それは残念です……

「ぬこには久遠がいるじゃん」

「みゃうみゃーう」

そんなんじゃないし！ 大体ぬこは猫で久遠は狐だぞ？

「あははは、わかってるわかってるって。種族を超えた愛なんて、ロマンチックだよなー。で、なにしに来たの？」

「みゃっ！ みゃみゃみゃ、みゃん！」

「ほほう、自分から病院行って注射されるなんて、アンタ漢だね。いいよ、私から愛に言っとく。病院代まけて欲しいってさ」

元が人間ですからね。それほど注射が怖いわけじゃないんですよ、ぬこは。

それよりも、自分が変な病気を持っていないかの方が怖いのです。ごしゅじんに迷惑がかかりますからね。

だから、病院代をまける交渉をしてくれる美緒にとっても感謝のぬこです。

「にゃー！」

「いって。これも海鳴猫の元締めたる私の役目だかね！」

この町は、本当に猫に優しい町だ。

ぬこは、この町に連れてきてくれたママネコときようだいへ感謝を捧げたい。

だからさ、またいつか会えるよね、かあさん……

と、そんなアンニユイでノスタルジックに良い感じでキメタぬこだったのに……

「あー、美緒ちゃん！ その子はっ！？」

12〜14才くらいにみえる薬臭い胸が平坦な美少女が、はあはあ息を荒げながら、手をにぎにぎしてぬこににじりよりつてきたせいで台無しです！

少女は腰まで届く銀色の髪がキラキラ輝いて、とても可愛い美少女なのですが、どこか近寄りがたい雰囲気醸し出していました。

普通の猫なら薬臭い時点で敬遠しますし、何よりそのオーラ。只者ではありません！ ようするに、怖い……

でも、ぬこは『そこは』特に気になりませんでした。

薬臭いのは病院帰りなのかな？とは思うけど、前世が人間だったから特に薬臭いのはきにならないし、ぬこには変なオーラはわかりません。

「おつ、フィリスじゃん。この子は高町さんちのぬこ。たぶんだけど、この子ならフィリスに懐いてくれるんじゃないかな？」

「ほ、ほんとっ！？」

美少女だけど、変に鼻息荒く興奮してるのは何だかな。だからちよつと煩わしいんだけど、黙って頭なでなでされたりもふもふされる。

美緒さんの顔を潰すわけにはいきませんもんね。本当は、胸が平坦なの、ぬこの好みじゃないんだけど……

「ほんとだー！ 私が触っても逃げないっ！」

「……やりすぎないようにね。ほどほどにしないと、この子にも嫌われるよ？ それにこの子さ、久遠の……」

「あー、この子がそうだったんだ。うーん、もう、かわいいっ。……ね、ねえ、ぬこちゃん。久遠なんかより、私と恋人になりませんか？」

「にゃん」

久遠は恋人じゃない。でも断る。

「みゃみゃみゃみゃん」

おっぱお大きくして出直してきやがれ。

「いや、流石にそれは言いすぎだつて」

でも、ぬこの言葉が解らないフィリスは、嬉しそうにぬこを抱きかえると、まずは頬ずり。

そしてお腹を自分のちっちゃな可愛い顔に押し付けて、もふもふもふもふ。

次は肉球ぶにぶにぶにぶに。

10分がすぎ、20分がすぎ……30分になり1時間が……
おわらない、おわらない、おわらない……

ぬこのちっちゃな耳がピーンと立って、もこもこ尻尾も天をつく！

「なー！ なーなーなー！！」

いいかげんに、しろーっ！

以降、フィリスちゃんはウザい子としてぬこに認識されちゃいま
した……

……ちょっとかわいそうですね？

今回名前の出たとらはキャラを知らない人のための人物紹介

陣内美緒……とらは2のヒロイン。猫耳猫尻尾付美少女。恐らくだが、夜の一族の血を引いた先祖返りだと思われ。

ってか、99.99%は人間だが、残りの0.01%が猫の遺伝子持ち。つてのが原作設定。意味がわからない。

先祖が猫と結婚して子供でも産んでたのだろうか？ それともハイブリット・ヒューマン？

前者だとしたらアリサがメインヒロインでも問題ないな。この世界では猫と子供作れるって証拠だしw

話戻して、養父である啓吾と高町父はこっさり繋がりがある設定だが、それが生かされることは多分ない。

フィリス……とらは2で敵役。とらは3でサブキャラ。そしてリリカルおもちや箱でヒロインに昇格した出世人。

HGS持ちの戦闘用クローン体。似たような設定のフェイトよりも数倍過酷な原作設定持ち。ってか、彼女の設定をマイルドにしたのがフェイトっぽい感じ。

小動物大好きなのに、病院臭いせいなのか盛大に嫌われてる可哀そうな人。

ちなみに彼女のオリジナルであるリスティは、逆に動物関係には滅茶苦茶好かれてる。つてことはHGSは動物に恐怖感を与えない？ 現在はお医者さん。成人ぶってるけど実年齢は7〜8才。みかけがちみい美少女である。

暗いの怖い。幽霊やだ！ あんまり怖がらすとお漏らししちゃうかも……恭也とのあのシーンではしっかりお漏らししちゃったしね

念の為に言つとくけど、ぬこのヒロインではない。

愛…… とらは2のメインヒロイン。獣医さん。野良は無料なんて恐ろしい経営をしてる人。料理はシャル級といえば理解できるな？リリカル第一話でユーノの治療したのはこの人らしい。ってことは、ジュエルシードの被害をともに受けた可哀そうな人でもあるのだろう（涙）

本作ではロリジャイことらは2の主人公耕介と結ばれた設定。ちなみにこの作品において名前だけで出番はない。

久遠…… とらは3での那美ルートの鍵キャラ。リリカルおもちゃ箱でのなのちゃんの相棒。リリカルなのはでそのポジションをユーノに取られた。

永遠の子狐モード搭載。巫女幼女に変化可能。大人巫女に変化すると尻尾が5本に増える。

昔彼氏を残酷にぬつ殺されてぶち切れた衝撃で祟り狐に。日本3大悪妖に並び称される。でも今は猫にすらいじめられる。

でもとってもつおい……はず。雷ばりばり。くく。くうくん。

これでどんな人物なのか分かった奴は天才だ。

この作品、主なオリキャラはネコしか出ません。ってか、ママネコ、きょうだいぐらいなもん。

高町なのは めこのいる風景

これは夢だよね……？

なのははそう思った。

だって、夢の中の大人になったなのはの周りには、家族がいない。大切な大切な家族が。

なのになのはは笑っていた。それが当たり前なんだと。

なのはの両隣にいる友人と思しき2人。

アリサとすすか……ではない。
見知らぬ人だ。

しかも夢の中のなのはは空を飛んだ。それも、とても気持ちよさそうに。

少し羨ましいと思ったけれど、その後の自分の姿に、やっぱりこれは夢なんだと拒絶した。

だって指からビームを出して、「少し、頭冷やそうか……？」って怖いことを言ってるから。

ビームを浴びせられた女の人の恐怖と絶望と虚無に苛まれた顔が、なのはの脳裏に焼きつく。

……むしろ私が頭冷やそうよ？

なんて思いながら、なのはは心の底から願うのだ。

帰りたいと。

大好きな家族と、親友と、ぬこちゃんの居る、あの場所に。

わたしは高町なのは、小学一年生。

家族は父と母と大好きな兄と姉。それにぬこちゃん。

親友はアリサちゃんとすずかちゃん。

得意な科目は理系全般。

趣味はゲームとぶにぶにともふもふ。

特技はA V 機器の取り扱い全般ともふもふ。

将来の夢は、おかーさんみたいな喫茶店の店長さん兼もふらー。

それか、おにーちゃんのおよめさん兼ぶにらー。

この2つの夢の素晴らしいところは共有できる所だ。

なのはは信じてる。奇跡を！

たとえば、実は自分は母の連れ子で、兄は父の連れ子とか……

そうすればなんの問題もなく結婚できる！

そうして、おとーさんとおかーさんのように、おにーちゃんとなのははふたり仲睦まじく、平穏に、幸せに暮らしていくのだ。

そう、だからきつとこれは夢。夢なのです。

もう魔法少女になりたいとか、お空を自由に飛んでみたいとか思いません。

だから帰して。わたしを、家族のもとに、かえし、て……………

なのはは、夢の中で大人になった自分が、「ブラスター3、エクシードモード発動!」とかいって光り輝くのを最後に、目に映る光景全てが光になった。

光、光、光……

その光の先に……………

……手を伸ばす。

光の先に僅かに見えた黒いなにかにむかって。

それを掴んだかと思った瞬間、目が覚めた。

なのはは息をハアハア切らしながら、のそりと身を起こした。

不安に苛まれながらキョロキョロ周囲を見渡せば、見覚えのある部屋。

部屋の中はまだ暗く、まだ夜明け前なんだと分かった。

「やっぱり、夢だったの……………」

ホツと胸を撫で下ろし、なのはは寝汗に濡れたパジャマのまんま、もう一度お布団を頭までかぶった。

まだ私が起きていい時間じゃない。

そんな言い訳をしながら、なのはは今度こそ好い夢をみるのだと、もう一度目をつぶる。

今度の夢は、見知らぬ少女とアリサちゃんが、何でか分からないけどいがみ合って喧嘩してる夢だった。

「ちよつと！
いい加減にはなさいっ！」

「ダメ……！　くおん、
　　といっしょだもん」

「おー！ 私といっしょだね！？」

「ちがう。ありさじゃない。くおんといっしょ！」

なのはとずかは、そんな2人を見て笑うのだ。
それはとても楽しい夢だった。

とてもとても、とても……

だから……

なのは祈ります。

この夢が未来になれと。

さて、高町家の朝はとても早い。
でも高町なのは朝は遅いのだ。

兄と姉が剣術の朝稽古に出ても眠り続け……
父と母が家業の喫茶店の準備に家を出ても眠り続け……
兄と姉。父と母が朝食のために家に戻ってきてても、まだ寝てる。

でも、それは仕方ないとなのはは思っただ。
だって遅いつていても、それはなのはの家族と比べてのことで、
一般的な家庭から見たら十分及第点である。

兄と姉が朝稽古に出るのは日が昇る前。
父と母はそれよりも若干遅いが、それでも日が地平線を照らす頃。

元より低血圧気味なのはには辛すぎた。

それでも起きようとする努力はした。
大好きな兄の朝稽古を見てみたい。
もしくは疲れて帰ってくる兄を笑顔で出迎えてあげたい。
だけでも、無理して起きてもフラフラで、見かねた兄と姉に自分の
部屋のベッドに放り込まれたのも最近の記憶だ。

そうは言っても、以前に比べれば大分よくなったのも事実。
前は朝食の準備が出来てから起きたものだが、今は朝食の準備が完
全に終わる前に起きることが出来た。

しないけど。

なぜかって？ それはね……

キ、キィ……

あの子のために僅かに開いたままにしてあったドアが、軋んだ音を立てて開いた。

起きる時間なんだ……

2度目の夢は楽しかったから、もうちょっと寝てたいです。

そう思わなかったと言ったらウソになるけど、それ以上の欲求がないにはあった。

思わずまぶたを開きそうになる衝動をこらえ、なるだけ自然に寝息をくーくー立てる。

するとなのはが眠るベッドの上に、ぴょんと何かが飛び乗る衝撃。

てとてとてと。

足元から枕元に歩み寄ってくる小さな気配。

顔がくふふ、とにやけそう。

話を聞いたすずかとアリサが心底羨ましがった、なのはの毎日の朝。

あれ以上の快楽はあんまりないと、なのはは思ってる。

だから、はやくはやくはやくっ！

なのはの願いが通じたのか、それともそれがその子の役目だからなのか。

「にー」

耳元で鳴く子猫の鳴き声。
早く起きろと鳴いている。
でも、なのはは起きない。

「にーにー」

起きない。

ぜーったいに！ 起きない！！
だから、早くしてよ、ぬこちゃん。

期待に胸が熱くなる。

それはまるで恋のように……

もしもおにーちゃんがいなければ、なのははぬこちゃんに恋したか
もしれません。

なんて思っていると、なのはの頬にぺしん！と衝撃が走った。

ぬこのぷにぷに肉球で叩かれたのだ！

思わず伝説の魔法少女、カードキ プターさ らちゃんみたいに、
はにゃんってなっちゃいそう。

でも、まだダメ！ あと4回！ 4回ねこばんちされるまでは、ぜ
ーったいに起きないっ！

「な〜う？」

おきないの？

そう言われてる気がして、なのはは罪悪感が……

でも絶対に起きないもん！

無駄に闘志をみなぎらせるのはだったけど、そんな彼女に応えた
のか、ぬこのぬこばんちが再び炸裂した。

「にゃう！ にゃう！」

ぺしん！ ペしん！

右ぬこばんち、左ぬこばんちの素晴らしいまでのコンビネーション
ブロー。

なのははもう昇天しちやいそうです！

だけど、まだ！　まだなのっ！
あとにかいつ、にかいなのっ！！
それまでなのはは死ねないのっ！

そんななのはの決意に応えてか、ぬこはなのはの平坦な胸の上の
つかると、大きく両の前足を上げた。

そうして……

「にゃうっ！」

なのはの両頬を挟むようにして、ぺしん！　と今必殺のだぶるぬこ
ぱんちっ！

ぬこのぷにぷに肉球が、なのはの頬をぷにぷにする。

しあわせ……

小学一年生にして、ちょっと間違った方向に逝きかけてるなのはは
今日も元気。

頬を挟んでうにゃうにゃ言ってるぬこを抱きかかえる様にして起き
上がる。

「おはよーぬこちゃん！」

「みい」

至福の顔で挨拶すると、なのははそのままぬこを押し倒す。
ふわふわもこもこのお腹に顔を押し付けまふまふするのだ。
なのはの毎朝の習慣は、ぬこぱんちで起こされて、そうしてぬこの
お腹をモフる。

一級の【もふらー】【ぷにらー】として自然な行為。

もふもふ、もふもふ……

まふまふ、まふまふ……

「はにゃ〜……しあわせなお」

「うにゃーっ！」

「あー、またやってるよ、なのは……」

「なのはったら、ほんとにぬこちゃんのが好きなのね」

これが、高町なのはのぬこがいる風景である。

こんなのが、毎日、毎日……

いつか彼女が大人になるその日まで、ずっと、ずっと、続くといいね。

おまけ（理想郷分打ち切りEND用未来話）（前書き）

以下の内容は、この先の展開とは違います。

以下の話は、本編より100年後……すずか以外の人間は皆お亡くなりになっています。

ついでに一つ。

この とわのこぬこの地の文は、童話の絵本的語り口調（女神さまバージョン）での他人称を基本にしています。

おまけ（理想郷分打ち切りEND用未来話）

海鳴市国守台。

そこには、今の時代にはとても珍しい、深い、深い、森がある。

市に隣接するようにうつそうと木々が生い茂るその森は、市民の憩いの場としては深すぎるものの、子供が迷って危険だ、とか言われることのない不思議な場所だ。

それは、なんでかと言つと……

不安そうにきよるきよる辺りを見回しながら、とぼとぼ森の中を歩く一人の少女がいた。

年の頃は小学校に入学したかしてないか。

髪は栗色。セミロング程度の長い髪をツールにしてるのは、母親の、そのまた母親の、そのまたまた母親の……と、先祖代々受け継がれし伝統の髪形。

そして、大きいクリクリした瞳には、涙が今にも零れ落ちそうなくらい、たまっていた。

「あつ……ママあ……」

迷子なのだろう。

泣き出す一步手前の声だ。

でも、少女は生来の気の強さからか、必死に泣くのを堪えてた。

もつとも、それが決壊するのも、時間の問題だろうけど……

バサツと大きめの鳥が羽ばたく音が森に響く。

少女はビクツと身体を震わせると、遂に我慢しきれなくなったのか、ボタンと涙の一滴で地面を濡らし、スンと鼻をすすった。

大きく口を開けて、悲鳴のような助けを呼ぶ鳴き声を上げた瞬間、でも、「みゃー」と小さな猫の鳴き声が、少女の鼓膜を震わせます。

少女はグシグシ泣きながら。猫の鳴き声のした方を見てみると……

そこには、小さな小さな、黒い子猫が。

「にゃうっ。」

どうしたの？

少女には、子猫が自分にそう言っているように感じました。

「あのね、なのは、迷子なの……」

少女は足元にすり寄って来た子猫を抱き下げると、すんすん鼻をすすりながら、どうして自分が迷子になったのかを説明しました。

お庭で遊んでいたら、ちょっとした不注意で、おじいちゃんが大切にしている盆栽にボールを当てて割ってしまったのだ。

そこで謝ればよかった。そうすれば、少し怒られるだけで終わった話だったのに。

でも、謝れなかった。適当な言い訳をして、家を飛び出してしまったのだ。

そしてそのまま隠れるように森の中に迷い込み、迷子になってしまった、というわけ。

それを聞いた子猫は、「みゃうっ！」と少女を咎めるように一声鳴くと、ぺしんと少女のほほにぬこばんち。

少女は子猫のぷにぷにした肉球がとても気持ち良く感じたのだけれど、自分が怒られているのだと分かっていたから、「ごめんなさい」と素直に謝った。

そして思うのだ。どうしてあの時謝れなかったのだろうか……そのことが情けなくて、恥ずかしくて……ぼろぼろ、ぼろぼろ……涙が次から次へとこぼれます。

「かえりたいよう……ママとおじいちゃんにごめんなさいしたいよ
お……」

えんえん泣きながらそう言う少女に、子猫は、「なーっ！」まかせ
ろっ！ そう言って、少女の腕の中から飛び出しました。

そしてもう一度、「なーっ！」大きな、大きな、森中に木霊する大
きな鳴き声。

すると……

「くーん」

可愛いつぶらな瞳の子狐が。

「にゃっ?」

長い金毛で、なんでか尻尾が2本ある、とても美人な猫が。

それぞれ現れて子猫の両隣りにちょこんと座り、少女の方を見上げ
ます。

そして、もうひとり……

「あー、こんなとこにいたんだ。だめだよ、なのはちゃん。みんな

心配してるよ?」

紫色の長い髪。とても美人な女のひと。

昔、昔、いつぱいむかしから、なのはの高町家の大切な友達。

「すずかおねーちゃんっ!」

少女は、すずかと呼ばれた妙齡の女性に抱きつき、わんわん大泣きすると、泣き疲れたのか、そのまま眠ってしまいました。

すずかは少女を大切そうに抱き上げると、ホッとした様子で少女に微笑みかけながら、

「ありがとう、ぬこちゃん、久遠、それに……」「にゃー」気にしないでいいわよ、すずか。「もう、お礼くらい言わせてよ」

でも、金毛の猫は、ふんつてしてそっぽ向くと、そのままぬこと呼ばれた子猫の横に立ち、「みゃう」帰るわよ。そう言っ、すたすた立ち去ります。

「またね」

「にゃ」

「ばいばい、久遠」

「くー」

「みんなをよろしくね、ぬこちゃん」

「なーっ！」

「みんな、本当にありがとー。おいしいもの用意しておくから、今度食べに来てねー、絶対だよー」

「「にゃー（くーん）」」

さあつと、森の中に帰った子猫たち。

すずかは名残惜しげにいつまでも子猫達の去った方を見ていたけれど、「さあ、帰ろうか。ちっちゃいなのはちゃん」小さな声で、腕の中で眠る少女に告げると、人の住む街に足を向けた。

人間が去って、森は、少しだけ静かになった。

風の音、鳥の鳴き声、獣の唸り。

自然な森の、静かな生命の音しか聞こえない。

国守台には『主』がいる。

長い金毛の長毛種の猫又と、大きくなったり、小さくなったりする
5尾の狐。

そして、その2匹の旦那さまである、こぬこ。

市民に愛され続ける3匹の獣の王がいるから、いつでも国守台の森
は、とても人に優しい、大きな森で。

とわのこぬこが、守っているから……みんな、大好き。

おまけ（理想郷分打ち切りEND用未来話）（後書き）

理想郷打ち切りエンドバージョン

しかし書きあがった時には既に消去
仕方なく活動報告上げた話です。

注意！

本編でぬこは獣の王フラグを立てる予定は消えました。
本編でアリサは猫又フラグを立てる予定は消えました。

以上を頭に叩き込み、次回からの話をお読みください。

ちゅんきちはんたー ぬこ

その日、ぬこは自分が狩った獲物をごしゅじんに見せました。
胸をはり、「なーっ！」と自信満々に。

ごしゅじんは数瞬、目をパチクリさせたあと、ふわっと笑ってぬこの頭を優しく撫でます。

「頑張ったな、ぬこ」

「みゃー！」

「おっ、凄いじゃないか！」

「にゃーん！」

ごしゅじんもしろーも褒めてくれます。

桃子さんとみゅーは、ちよつと複雑そうだけど、それでも一杯褒めてくれた。

ただ、なのはだけが……

「めーっ！　ぬこちゃん、スズメさん食べちゃ、めーっなのっ！！」

「なう？」

焦った様子で両手をばたばた。

ぬこはなんで？　と首を傾げます。

だって、このスズメはぬこが狩ったんだよ？

「なのは、ぬこは猫だ。猫である以上、狩猟は本能なんだよ」

「で、でも、スズメさん、可愛いそうだとなのはは思います！」

ああ、そうだ。そうだった。

ぬこはなのはの言葉によく気付いた。

自分も人間だった頃に、こういう風にスズメ見せられたのなら、きつとなのはと同じ反応しただろうなって。

ぬこはぷにっとした肉球の下で、まだ死にたくないともがいているスズメを見てみた。

ばたばたばたばた……羽を必死に羽ばたかせて。

ぬこのアギトから逃れようと必死なスズメを……

舞い散るスズメの羽綿子。

急に湧き上がる罪悪感は、人間だったころの名残でしょうか……

でも、ぬこはもうぬこなのだ。

もう、沢山の命を狩っている。

その命、血の一滴まで無駄にはしてないと誇れるけれど、でも、でも……

肉体は精神の器という。

ぬこは、もう人間じゃなく、ぬこなのだ。

ぬこは、狩った命に対する罪悪感を捨てた。
きつと、その命に対しても失礼だから。

でも、チラリとなのは見た。

なのはは怒ってる。スズメを狩ったぬこを、怒ってる。

「……みい」

悲しそうな声で鳴くぬこ。

「あつ……」

そんなぬこに、なのはも気まずそうな声をもらした。

「なあ、なのは」

「はい、なんでしょうか、おにーちゃん……」

「昨日の夕ごはん、何を食べたか覚えてるか？」

「えっと……チキン……ライス……です……」

それだけでなのは、ごしゅじんが何を言おうとしているか分かりました。

昨日なのはが食べたのは、鳥さん。

ぬこちゃんが捕まえたのも、鳥さん。

違いは目の前で生きているかいないかだけ。

「それにな、なのは。猫が自ら狩った獲物や宝物を見せてくれるのは、信頼と親愛の証なんだぞ？」

「……うん」

ぬこは悪いことしたわけではないのだ。

でも、なのはの感情は納得できない。

今もぬこの足元では、必死に生きようとがくスズメがいる。

「みゃう……」

そして、おそろおそろ、なのはの様子を伺うぬこ。

なのは、はふう……と大きくためいき。

そのため息は、小学一年生にしては、とても大人びたためいき。

「ねえ、ぬこちゃん。あのね……」

その日から、ぬこは週に1〜2度程度、狩りをするようになった。きつとそれは、高町家の飼い猫じゃないと、中々許されないこと。高町家の家主である土郎じゃないと、嫌悪されてしまうこと。そんな土郎に育てられた高町の子供だから……きつと。

初めは庭でスズメ狩り。

次に高町家から出て色々な場所で色々なものを狩った。

最近のお気に入り海。

砂浜で磯ガニを捕まえたり、干潮で出来た潮だまりで魚を捕まえた
り。

そしてどんな獲物も、最初の一匹目は高町の家族に披露する。

ごしゅじんに、ももこに、みゅーに、しろーに、そして、なのはに

……

みんなみんな褒めてくれる。
ぬこを一杯、ほめてくれる。

「ぬこちゃん。今日はおうちで日向ぼつこの日っ。」

「みゃうっ」

「今日は狩りの日だそうだ」

「あう……あとでキッチンと齒磨きしなきゃダメだよ?」

「なーう」

「で、今日はどの辺に行くの?」

「にゃうっ」

「国守台の方へ行ってみるそうだ」

「気をつけてね? あの辺、野良犬とかも出るそうだからね?」

「みゃう」

ちゅんきちはんたー めこ（後書き）

ちゅんきち：u y r y a m a は昔からスズメさんのことをこつ呼ぶ。

恐らく赤ちゃん語の一種だと思われる。

うちのねこさん：おやつを貰った場合、一頻り喜んだあとで飼い主であるu y r y a m a に何度も見せに（自慢？）にくる可愛いやつ。

かのじよとのであい

春が終わり、夏がきた。
暑い暑い夏だ。

ぬこはこの季節があまり好きじゃない。

だって、毛皮が暑くて蒸れるんだもん。
それでも冬よりは断然マシだけどさ。

にゃーにゃー、ぬこ語で独り言いいながら、八束神社へと続く長い
長い石段を、よいしょ、よいしょとよじよじ登る。

10段、20段、30段……

ぬこの小さい身体では、とてもきつつい石段だ。
それでも野生の力なのかな？

都合、軽く100段は超える石段を、さほど疲れた様子もみせず、
一気に鳥居のある場所まで到達した。

ぬこは見晴らしの好いこの場所で、海鳴の街を眺めます。

石段の下った先の道。

そこからまっすぐ先に、ぬこの住む高町家がある。
更に視線を遠くにする。

天高く舞つように飛んでいる、白い鳥……カモメの群れが見えた。
その眼下には、空とも見紛う青い海。

ぬこは、すうーっと、大きく息を吸い込みました。

……潮の香り。

山の緑の香り。

アスファルトが焼けた臭い。

車の排気ガスの臭い。

それら全部がこの街の香り。

「みゃ〜」

夏のキツイ日差しが差し込む。
目を細くする。

もう一度。

「みゃ〜」

今度は、海まで届けと大きく鳴いた。

すると、遠くに見えたカモメが大きく旋回した。

まるでぬこの鳴き声に応えたみたいに。

ぬこは前足をひょいとあげる。

ちっちゃい顔の横に上げられた前足は、ぷにぷに肉球が丸見えです。そして、最後にもう一度「みゃー！」今まで以上に大きく鳴いた。

再び大きく旋回するカモメ。

ああ、この街は本当にいい場所だ。

優しい街に、優しい住人。

暖かい高町家と、その友人達。

そう思いながら、遠く、遠く、海の方こうをぼーっと眺めた。

鳥居の真下。その中央にちよこんと座り、いつまでも、いつまでも飽きることなく遠くを眺めた。

そうしていると、ぬこの背後。

鳥居の方こうにある神社から、一匹の獣の気配が近づいてくる。ぴくんつ。ぬこの耳が反応した。

……狐の気配だ。

狐は、ぬこの天敵です。

でも、ぬこは動こうとしない。

だって、この狐は……

「くう〜ん」

「みい」

ぬこになって、初めて出来た、お友達。

アリサやすずかも、お友達といったらそうだろう。

でも、違うんだ。

ぬこには解る。

この目の前の子狐が、ぬこととても近い存在なんだって。

ぬことおんなじ、ずっとちっちゃいままなんだって。

ぬこは子狐……久遠にまわりつかれながら、この子とお友達になったあの日のことを思い出します。

それはまだ、ぬこがこの海鳴に来たばかりの頃でした。

小春日和の暖かい日差しの下で、今日もぬこはお昼寝状態。

いやいや、それしかすることがないのだ。

ぬこは高町家に養われるようになって以来、外へは一歩たりとも出てはいなかった。

初めは安地での安らかな生活に満足してたぬこですが……

……いい加減、飽きてきてストレスがマッハです。

時折、庭を訪れるスズメたち。

遠く海の方を優雅に飛んでるカモメたち。

自由っていいなー。

なんて思いながら、庭でチュンチュン鳴いてるスズメにターゲットロック。

おなかはずいてないけど、暇なせいか狩猟意欲がどんどん高まってく。

ぬこは前世の人間だった頃の感情を消し、肉体の欲求のまま身を伏せた。

……ジリジリと焦げるような感覚。
呼吸を抑え、気配を周囲と一体化させる。

10分がたった。

でも、ぬこは動かない。

20分が過ぎた。

でも、ぬこはまだ動かない。

30分が過ぎた頃、ようやくスズメの一匹が、ぬこの一足飛びの範囲にやってくる。

すうっと静かに、だけでもとても大きく息を吸い込んだ。

四肢の筋肉を限界まで突っ張らせ、脳内に描くイメージは、ママネコがフクロウを狩った時の抜爪牙。

……よし！ いける！！

ぬこは、弓のように引き絞られた肉体を解き放つ！

いや、解き放とうとした瞬間……

「ただいま。ぬこ、いい子にしてた？」

玄関を通らず、直接庭へと来たみゅーのおかげで、ばさばさばさつと一斉に飛び去っていくスズメたち。

「みゃー……」

遠く、爪と牙が届かない場所へと飛んでくスズメたちを無念の思いで見ていると、みゅーがぬこの首根っこを掴んで持ち上げた。そうして中学生にしては程よく育った柔らかい所にぬこを挟み、

「あー、癒される……」

はふうくとため息。

みゅーは中学3年生。

受験生なのです！

みゅーもストレスがマッハなのです！

だからぬこがおっぱおにペシペシぬこパンチ食らわせて抗議しても、そんななんまったく気にしねえー。

ぬこを抱いたまんま家の中に入ると、ソファーに座ってぬこを頼ずり。

ぬこが嫌がつてるのは解ってるけど、今はストレス解消の方が大事みたい。

そうしてブツブツと愚痴り始めるみゅー。

「大体さあ、私って受験生なんだよ？　なのに恭ちゃんったら……
そりゃあ剣術好きだし、やるって決めたのは私だけどさ……」

こうなったらもうどうにもならない。

ぬこは仕方なく、「にゃあ」とみゅーの話に相槌します。

まあ、みゅーは大切な家族の一員ですからね。

「そうなんだよ！　恭ちゃんは横暴だよ！　大体普段は勉強しない、
授業もともに受けないダメダメ学生のくせして、しっかり高校入
試をパスしてるとかありえないってぬこも思わない？　そのせいで
私のハードルが上がってんだよ？　だって考えてみてよぬこ！　も
しも私が入試に失敗したら……　『あの』恭ちゃんでさえ受かった
高校に落ちたってレッテルがあーっ！　そんなブレッシヤーがかか
ってる私に意地悪ばっか言うんだよ！　鬼畜だよ！　鬼だよ！　悪
魔だよ……」

「そうか……鬼畜で鬼で悪魔か……」

感情を抑えたおどろおどろしい声が聞こえたかと思うと、メキメキ
メキメキッ！　と骨が軋む音。

「にゃ、にゃあ……」

恐怖に震えるぬこの視線の先は、いつの間に帰ってきてたのか、み

ゆーの頭を鷲掴みするごしゅじんの姿。

ごしゅじんの握力は80kgオーバーの人外クラス。

そんな人外パワーで鷲掴みされたら、みゅーの頭蓋骨が割れてしまいますよ!?

「みぎやーっ」

みゅーの断末魔の叫びに、ぬこはぬこ耳をぱたんと閉じて、聞こえない、聞こえない……

つて、ごしゅじんやりすぎだ!

「ふむ、大丈夫か美由希?」

「あたたた……酷いよ恭ちゃん……」

みゅーは抗議の声を上げると、そのまま不貞腐れてソファーに沈んでしまいます。

そうして再び、今度はごしゅじんに聞こえる様に文句を言い始めたみゅー。

ごしゅじんは苦笑いしながらソファーに腰掛け、不貞腐れて顔をソファーに埋めたままのみゅーの頭に手を置きます。

ビクッと恐怖に身体を強張らせるけど、次の瞬間にはふにゃーっとな力が抜け落ちた。

みゅーの髪を、ごしゅじんが優しい手つきで梳き始めたからです。

「えへへ……」

「美由希、お前なら大丈夫だ」

「……うん。うんっ！」

なんでしょう、この空気は……？

突如桃色空間となった高町家内で、ぬこは置いてけぼり感でいっぱいに。

「みつ！」

このリア充ごしゅじんめ！

「なーう！」

股間が弾けて逝っちまえ！

瞬間、ごしゅじんによってポイツと投擲されたぬこは、華麗な空中3回転で床に着地すると、とある事実に気づいてずくんと落ち込んだ。

そうだ、そうなのだ！

ぬこは前世の人間だった頃の20うん年、童貞くんで人生を終えてしまった。

そして今生のぬこ生は……

ぬこはぬこであろうと誓ったけれど、流石にけだもの相手は御免被りたい。

かといって、ぬこなのだから人間と結ばれるのもまた違う気がする。

……もしかして、ぬこのこれからのぬこ生は、灰色ぬこ生が約束されてしまっているのでは？

「どうしたぬこ？」

様子のおかしいぬこに、ごしゅじんが心配そうに声をかけると、

「みゃみゃみゃみゃみゃみゃみゃみゃあーっ！」

狂ったように鳴きながら、家中を駆け回り始めます。

縦横無尽。ぬこ無双。

あまりの事態に顔を見合わせるごしゅじんとみゅーは、

「……家の中に閉じこもりっぱなしだから、ストレス溜まってるんじゃない？」

「そうかもな」

頷き合う。

「よしゅじんは、しばし瞑目すると」

「出かけるぞぬに」

そう言つて、壊れたみたいに暴れまくるぬこをヒョイッと捕まえま
す。

それでも暴れるぬこの背中を優しくポンポンと叩きながら、

「美由希、ぬこの首輪を買ってきてくれ」

「うん、わかった」

「それをするなら、これから自由の外で散歩してもいいだろう。
だからな、ぬこ。今日は俺との散歩で我慢しとけ」

「みゃー？ ……みゃうっ！」

ぜーたくは言わない。

ぬことして、彼女が欲しいとも言いません。

だから、せめてお外で駆け回りたいのだ。

いいや、もうちょいぜーたくに、お友達が欲しい。

ずっと、ずっと、ずーっとぬこと一緒にいてくれるような、可愛いおんにゃのこのお友達が……

彼女いらなとか言いながら、女の子（メス？）の友達捜しにいかうとしているぬに、ごしゅじんとみゅーは微笑ましそうにしています。

もしもぬこの心の内が読めたなら、きっとその笑みは曇りますのにね。

それにぬこ。アナタ、そんなこと言ってて本当にだいじょうぶ？

とある学校の、とある教室の放課後風景。

今週の掃除係が元氣一杯！ お掃除頑張ってます。
その中のひとり、金髪美少女が突然に顔を顰めました。

「……何かしら？ すんごく不快だわ」

わなわな震え、手に持つモップの柄がギシリと嫌な音を立てます。

「あ、アリサちゃん、どうしたの？」

ツインな栗色の髪の少女と、ロングな紫色の髪の少女が怖々と金髪美少女を伺います。

「きょう、なのはんちに行くわよ」

「ほえっ？ 今日は習い事の日だったんじゃないの？」

「そんなのパスよ、パスっ！ 大体今更なのよ、あんな習いごと！
だからいいの。さあ、なのはんにすずか！ さっさと掃除終わらしてなのはんち行くわよー！」

「ええっ！？ もしかして私も！？ わ、わたし、今日は塾が……」

「……仕方ないわね。すずかはいいわ。なのはっ、早くするわよ！
じゃないと、なんか取り返しをつかないことになるような気がするわ……！」

アリサ・バニングス。

彼女の【女】の勘が……

「浮気は……許さないんだから……ッ!」

ぬこの真実に、辿り着く……?

かのじよとのであい につ

暖かい春の日差しの下で、大きくふわっとアクビする一匹の小狐。狐はポカポカ陽気に負けてしまったのか、眠気という衝動のまま神社の社務所の縁側で寝そべると、いつものようにお昼寝を始めた。春の風がさわさわと、狐のぼふぼふな毛並みを優しく撫でる。

きもちいい……

そう思いながら、狐はゆっくりとまどろみ始めた。

社務所の縁側でこうしていると思い出す。

情けも愛も全てを凍りつかせる怨嗟……ではなく、おひさまの匂いのするみつのこと。

憎くて憎くて憎くて……

どうしようないぐらい、憎い筈のこの場所が、みつを思い出すだけで少しだけ許せるように思えてしまう。

もちろん、それは錯覚なのだろう。

怨嗟を糧にして、育ちに育った負の想いの集積体【祟り】。

その大部分を封じられているからこそ、そう思えるのだ。

でも……

ゆらり。

狐は心地よさげにしつぽを揺らした。

ぱた、ぱた、ぱた、ぱた……ん。

ゆらゆら揺れるしつぽが、最後にパタン、と地面をたたく。
狐は、完全に眠りに落ち、失われてしまった大切な人達の、夢を見る……

みつ……

狐が親とも慕い、獣の道を外れる切欠となった巫女の名前。

わたしね？ お嫁に、行きたかったんだあ。
だからね、きつね。私の代わりに……

やた……

大切な、大切な……
狐が愛した人の名前。

ごめん、久遠。ぼくはきみの亭主にはなれなかったね。
でも、できればだよ？
きみはその名前の様に、いつまでもいつまでも……
ぼくの好きなきみでいて。
そして、ぼくの方まで、幸せに……

みつは、殺された。

山の神様を鎮める供物となるために。

やたは、殺された。

疫病を流行らせたと責を負わされ、石で殴打され、四肢を裂かれ、
ちぎられ……

人の形を成さなくなるまで嬲られて。

…… ゆらゆら揺れる。
神社のやぐらから吊るされて、ゆらゆらゆらゆら。
影が揺れる。やたの、首のない影が……

そつだ、ふたりは白い服の男に、コロサレタツ。

嚴重に封印された筈の黒い感情が、身の内の奥から湧いてくる。

憎い、憎い、憎い、憎い、ニクイ、ニクイ、ニクイッ!!

憎悪や怨念と呼ばれる暗く澀んだ感情が、久遠の中から溢れだす。

ただ会いたい。もう一度あの人達と会いたいだけなのに。

ただそれだけの、でも、だからこそ何処までも純粹なその想いが、狐を獣の領域から外させ、化け狐となる因をつくった。

どこまでも純粹なその想いが、久遠を『祟り狐』と呼ばれる怨霊へと変えてしまった。

……… いったい、誰が悪かったのだろう？

わからない。わからないけど……

ただひとつ。はっきり解ることがある。

久遠の怒りと悲しみが、

アアアアアアアアアアアア!!

目に映る全てを破壊しても、まだ治まらないということだ。

久遠に架せられた封印の鎖が、キシリと音を立てる。

湧き上がる怨霊としての衝動を、解き放たんがために。

でも、チラリと頭をかすめる沢山の笑顔。

かおる。こうすけ。あい。

そして、なみ……

みつや弥太に負けなくらい、大切な人達。

他にも神咲家の人達や、さざなみ寮の人達が、みんなみんな、久遠に笑いかけてくる。

怨念を解き放ってしまったら、この笑みは無くなってしまふのだろう。

でも、まだ足りない。

久遠の暗い衝動を抑えるには、まだ……

と、その時です！

ふわりと久遠の鼻をくすぐるおひさまの匂い。
みつや弥太とおんなじ、おひさまの匂い……

苦悶の表情を浮かべて眠っていた久遠は、そのおひさまの匂いに心が穏やかになっていくのを感じていました。

そして……

ぺしん！ と、何かに叩かれます。

くう？（なに？）

久遠がそう思っていると、声が聞こえます。

「みゃー！ みゃー！（じしゅじん！ じしゅじん！）」

「どうしたぬこ？」

「みゃんみゃんみゃーん！（これ！これ！食っていい？）」

「……ダメだ。飼われてるんだろう、首に鈴を付けてる」

「にゃうん……（ちえっ……）」

「くうーっ！？」

命の危険を感じた久遠は、ものっそい勢いで飛び起きます。

そして物騒な会話をしていた、真っ黒い人間と、真っ黒い毛玉な子猫に恐怖します。

慌てて久遠は後ろに飛び退き、一人と一匹のくろくろコンビから距離を取りました。

なんで？ どうして？

久遠の頭は【はてな】でいっぱい。

だって久遠は臆病だから、気配とかの察知に長けてます。
なのに、ペシッと叩かれるくらい近づかれるなんて、ありえないっ！

「ウッッ！！」

警戒に唸る久遠。

でも、ぬことごしゅじんは呑気なものだ。

「みゃあっ（ほら、しょせん狐はぬこの敵）みゃうん？（食べちゃってもいいんじゃない？）」

「だからダメだと言っている。飼い主に訴えられでもしたらやつかいだしな」

「にう……（それもそうか……）にー（あーあ、せつかくの子狐なんて滅多にない獲物）みゃーん（もったいないなー）」

まずいますいますっ！

どうやら狩られる心配はないみたいだけど、それでも何されるか分かったモンじゃない！

久遠はウゝッ！って唸りながらジリジリ後ずさり、一定の距離が離れるなり脱兎のごとく逃げ出した。

そのまま社務所のある場所から境内を抜けて藪の中に飛び込みます。さっきのくろくろコンビはついてこない。

久遠はホツと胸を撫で下ろしながら、藪の中から顔だけピヨコンとだしました。

すると、くろくろコンビは久遠なんて気にもとめず、

「みゃーっ」

「ん、なかなかいい攻撃だ」

楽しそうにじゃれ合っていました。

……必死で逃げようとしたのがバカみたい。

でも……

久遠はびくびくしながらも、ぬことごしゅじんの戯れる姿から目ははなせない。

「いくぞ、ぬこッ！」

ごしゅじんは、ぬこ目掛けて蹴りを放つ。

もちろん手加減してるだろう、その蹴りは、でも久遠から見たら随分強力で。

ちっちゃな子猫にしている攻撃じゃ、決してなかった。当たれば死ぬ。そんな一撃！

でもぬこは「みゃあっ！」と蹴りを後ろに飛んで避けると、その反動を使つて逆に攻撃に出た。

黒い毛玉が、ごしゅじんの顔面目掛けて放たれる！

ごしゅじんはぬこの攻撃に焦らず慌てず、ぽふっと受け止めやや乱暴な手つきでぬこの全身を撫でまわします。

「な」

気持ち良さそうなぬこの鳴き声。

ごしゅじんも楽しそうに笑ってる。

そんな一人と一匹を、久遠は藪の中からいつまでもいつまでも眺めていました。

ぬこと久遠の出会い篇、もうちょい続きます。

注！この作品は、原作とらハシリーズを知っているものとして書いてます。それはこの先も変わりません。

つてわけで、今回名前の出たとらはキャラを知らない人のための人物紹介

みつ……小説版、とらいんぐるハート3　那美・久遠篇に登場するオリジナル人物。

久遠がまだただの狐だった頃に出会った巫女さん（数えて16才）で、ひとりぼっちの久遠は彼女に母親を重ねていたらしい。

みつは親を幼い頃になくして以降、神主に育てられた。

食事中、久遠におかずの魚を奪われそうになり箸を突きつけると、

怯えてフルフル震える久遠の愛らしさにまけて半分こ。

それ以来、久遠に懐かれて友達となる。

近所に住む源吉と言う名の青年と想いが通じ合っており、彼のもとにお嫁にいくのが夢だった。

だが、それが叶わないことをみつは理解しており、事実、彼女が源吉と結ばれることはなかった。

孤児であるみつが何不自由なく暮らしていけるのは、神の供物として捧げられるためだったからだ。

後にみつは、嵐が原因による土砂崩れ等の災害を鎮めるためと、濁流の川に神の供物としてポイッと捧げられた。

久遠が妖怪変化になったのは、なんでかいなくなってしまった（久遠はみつが死んだと知らない）彼女と会いたいがため。

人型になった時の巫女装束も、記憶の中のみつを真似たらしい。ただ記憶がいい加減なので、変形型のコスプレ状態なんだとか。

弥太…… 久遠の名付け親にして彼氏。

ちなみに焼酎の酒樽に書いてあった【久遠】という字が名前のもと。久しく遠くへ……（笑）

眞実はいつも悲しい。

フォローをするなら、いつまでもいつまでも。っていう意味が格好よくて字面もいい。

でも焼酎の名前（笑）

それはともかく、弥太と久遠が出会うのは、みつがいなくなってしまってから20年強。

ある日突然に人型を取れるようになった久遠が、調子にのって走り回って転んで怪我した所を治療してくれた人が弥太である。

まあ、その後色々あって2人は結ばれる訳だが、幸せな時は続かなかった。

流行り病によって村が壊滅していく中、薬師であった弥太は懸命に村中を駆け回りなんとかしようとするも、それも叶わず。

毒に耐性があつた弥太を除き、ほぼ全ての村人が病に冒された。

弥太が一人だけ無事なのを怪しんだ神主は、弥太こそが病を広めた元凶とし、死の恐怖に怯えていた村人もそう信じてしまう。

弥太は自分を捕まえようとする村人達から、間一髪久遠のいる山へと逃げ出すことに成功するのだが……

村人総出と思われる山狩りと、何より自らも病に侵されつつあることに気づいてしまい、結局は久遠を逃がす為に村へと帰った。

その後は言うまでもないだろう。

どうやら【苦しめるための殺され方】をしたらしく、遺体は人の原型をとどめず、久遠の足元に転がってきた弥太の生首は苦悶の表情に満ちていた。

想いを重ね、身体を重ね、番いになりたいとさえ願った弥太の残酷な殺され方にブチっと切れた久遠は、【祟り】となって村を消滅させる。

その後は治まらない怒りと怨念で、弥太を殺した神主と同じ格好をしているという理由で日本全国津々浦々。神社仏閣を強襲し壊滅させまくった。

かおる……神咲薫、とらハ2のヒロイン。
たぶん、この先出てくるんで詳しい説明はなし。

こうすけ……とらハ2の主人公にしてさざなみ寮の管理人。
この作品では愛さんルートで御架月は不所持。通称ロリジャイ。
ちなみに神咲一灯流でもない、ただの人。
出番があってもほぼモブだろう。

……弥太の辺りから面倒になったのが丸分かりな人物紹介だったぜ
(汗)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0029y/>

とわのこぬこ

2011年11月20日18時56分発行